# "Closet" Love

## －現代における恋愛と性に関する事例調査を中心に－
## －a case examination of present-day love & sex－

小 野 宏 明

## I 目的・展開

現代の日本において恋愛や性に関する問題は欧米の諸外国に比べてまだまだタブーとされており、公衆の面前で話をされることは少なく、稀である。仮に話をされることがあるとしても、主として異性愛（ヘテロセクシュアル）を中心として展開される。しかし恋愛や性の形は決して1つではない。恋愛や性について語るとき、近年注目されている同性愛（ホモセクシュアル）の問題を抜きに考えることは出来ない。そこで私は「現代における恋愛と性」をテーマとし、なかでも特に同性愛に注目し、異性愛との実証的な比較研究を中心として本論文のテーマを明らかにする事を目的とした。

本論文を展開するにあたり、まず同性愛というものがどういったものであるのかを明確にする必要がある。そのために過去、日本において同性愛とはどのようなものであったか、日本の社会の中でどういった位置づけにあったのか、それが現代ではどのように状況が変化したのかといったことを述べている。そしてそれを明確に打ち出した上で、具体的に現在では同性愛者と異性愛者ではその行動や考え、そしてイメージなどにどのような違いもしくは類似点が見られるのかといった疑問点を、理論を交えて2通りの調査（質問紙、ライフヒストリー）の結果をもとに考察し、最終的に結論とした。

## Ⅱ　日本における同性愛の背景

日本では男性同士の性愛のことを古くは「男色」と呼び、仏門・武士・町人・公卿などあらゆる階級に男色があったという実態の記録が数多く残されている。また階級のみならず、時代についてもさまざまな記録があり、その階級や時代についての男色を知ることができる。そしてこれら数多くの文献から、古くから日本において男色がさかんに行われていたということを知ることができる。

同性愛の背景に関しては、

1．明治時代以前、特に江戸・戦国時代の男色について

2．明治時代以降から現代における同性愛の状況

の2点について述べている。

これらから、日本においても男性同士の同性愛嗜好がごく一般的に、男女の性愛と同じく扱われていた時代があり、この男性の同性愛嗜好は明治時代まで受け継がれ、ごく最近まで日本でも同性愛は一般的であったという事実が解る。しかし現在日本では同性愛者に対して罰則こそ無いものの、同性同士のカップルではどちらかが死亡したときも「婚姻関係」ではないので相続権がないなど、法的に何も保証がないという現状があり、過去と違って現代の同性愛者の立場は非常に厳しいと言える。

なお「補足」として日本と違ってデンマークと並び、現在世界で最も同性愛に対してリベラルに開かれ、同性愛も異性愛も法的に同じ立場にあるオランダの同性愛の歴史について記した。

## Ⅲ　調査の方法と内容

本論文の作成するにあたり、質問紙と聞き取りの2つの調査を行った。2つの調査を実施した理由は、質問紙調査法と聞き取り調査法、それぞれの長所を生かすことで、論文のテーマをより詳しく調べることが可能にな

ると考えたからである。

質問紙調査ではホモセクシュアルとヘテロセクシュアルの差異、類似点を見いだし、そこからホモセクシュアルの特徴をピックアップした。なお本調査では、セクシュアリティなど隠れた母集団を対象とするときに最も有効的な抽出法である「Snowball sampling」を行った。質問紙は、おおむね『セックス・イン・アメリカ』の性動向調査質問票をもとに日本に適した質問を選別し、なおかつホモセクシュアルとヘテロセクシュアルの類似と差異を見いだすということを目的に質問項目を選別し、本調査について足りないと思われる項目についてはそれを補う質問を加えて作成した。質問に対する回答はほぼ選択式である。調査対象者は近畿地方在住の18歳以上の男女で、ホモセクシュアルの方に関しては大阪にあるゲイグループ・レズビアングループに多大なる協力を賜った。

また聞き取り調査では、中央大学文学部社会学科・矢島ゼミナール同性愛調査研究会による『同性愛者のライフヒストリー』を参考に調査対象を個人に絞り、ライフヒストリーを詳しく調べた。

ここでは成長段階の中でいつ頃自己の性的嗜好に気づいたか、その契機とプロセス、気づいたことによる悩みがあったかどうかという心理過程、いつ頃恋人及びパートナーができたか、性行為を行ったか、それはどのような性行為だったか、性行為をした人が複数ならばその人達との関係、などのライフヒストリーを調べた。調査の際、会話のすべてをテープに録音しておき、調査終了後、まとめたライフヒストリーを被験者の方に点検していただき、必要があれば修正・加筆・削除をしていただいた。なお会話を録音したテープはプライバシー確保のため被験者の方にお渡しした。

調査対象者は、自己のセクシュアリティを確立している男女とした。

## Ⅳ　調査結果の分析

まず質問紙調査は質問は大きく３つ

A．基本的属性

B．恋愛と性に関する質問

C．男女の性度

に分かれ、主に「恋愛と性に関する質問」「男女の性度」でホモセクシュアルとヘテロセクシュアルの差異、類似、そしてホモセクシュアルの特徴を見いだしていき、3つの仮説と3つの見解の検証を行った。ここでは仮説の検証のみを記すことにする。

仮説と検証結果は以下の通りである。

〈仮説〉

1．ヘテロセクシュアルはモノガミー指向の人が多く、ホモセクシュアルはポリガミー指向の人が多い(注)。

2．同性愛の関係は身体の関係から始まることが多い。

3．男性同性愛者には女性的な人が多い。

〈仮説の検証〉

1．実証されうる。

2．実証されうる。

3．傾向は見られるが、限定はできない。

質問紙調査では、セクシュアリティというという大きな集団でとらえ様々なデータ（角度）から差異や類似点をみたが、両者の間にそれほど大きな違いは見られなかった。

次に聞き取り調査であるが、記述は全体を大きく3つ

［A］プロフィール

［B］ライフヒストリー

［C］見解、認識、その他

に分け「ライフヒストリー」で年代を区切り、フロイトなどの理論を引用し、同性愛嗜好を形成する後天的要素についてフロイトの理論5つを検証した。

またこのライフヒストリーの中で、被験者の方の答えが重要であるか微妙だと思われる箇所は、より正確に再現するためにQ and A方式で表現している。

仮説と検証結果は以下の通りである。

〈フロイトの仮説〉

1．生後6年間の経験、対人関係のあり方でその素質の相対的強さが決定され、いずれかの性愛に方向付けられる。

2．エディプス期（2～6歳）における母親との関係（男性のみ）

3．エディプス期の両親との三者関係

4．エディプス期以降の同性や異性との仲間関係

5．思春期から青年期における異性関係（主として性的関係）

〈仮説の検証〉

1．当てはまるとは言えない。

2．当てはまらない。

3．当てはまらない。

4．当てはまる。

5．女性に当てはまる。

ライフヒストリーで明らかになったことは、ホモセクシュアルを形成するであろう後天的要素を検証してみると、幼児期に経験した要因が最も強く影響しているということである。

## V　結論と課題

2通りの調査を通して「ホモセクシュアル」の全体像を見てきたが、最終的には「ホモセクシュアルとヘテロセクシュアルに大きな違いはない」という結論にたどり着いた。「性的嗜好」以外に違いがあるとすれば、それはホモセクシュアルとヘテロセクシュアルの勝手な思いこみによってつくられたイメージと現実のギャップであると思われる。具体的には、異性

愛者の偏見に満ちた押しつけ、加えて同性愛者自身の悲観的な思いこみによって多くの同性愛者は自分の性的嗜好を隠さざるを得ず、社会から孤立感を感じ、「異性愛者は多数派と言うだけでエゴイストになっている」など異性愛者に対してマイナスイメージばかりが先行していき、異性愛者もマス・メディア以外で同性愛者を目にすることが少なく、仮に自分のそばに同性愛者がいたとしても、その人がカミングアウトをしていない限り気付かないことが多く、実態がつかめない。よってマス・メディアのオーバーなイメージだけが頭のなかで固まってしまい、「同性愛者はエイズの根源である」といった根拠のない観念がついてしまっているということである。しかし実際は両セクシュアリティとも何ら変わりはなく、こういった思いこみこそが間違いだと思われる。

今後の課題として、性的嗜好を検証するときにはフロイトの理論を引用することが多いが、後天的要因は人によって様々であるので、一つの理論にこだわらずに、いくつかの理論も合わせてみることが必要であると私は思う。また聞き取り調査を行う場合、信頼性を高めるためにケース数を多めに設定すること、質問紙をつくる際には偏った質問内容にならないようにし、代表制の保証を考えることが重要だと思われる。

そしてなにより、このようなホモセクシュアルなど、セクシュアリティの研究をする際は、もう1度頭の中を空にして、自分の中にある思いこみを排除し、正しいセクシュアリティの知識を得ることが必要である。しかしこれは研究者だけではなく、全ての人が考えなければならないことである。たとえ自分の考えや経験とは違うものであってもそれを排除するのではなく、違うからこそ分かり合おうとする心を持ち、自分の偏見や思いこみをなくす努力をすることで、よりよいホモセクシュアルとヘテロセクシュアルの関係が生まれるのではないだろうか。

恋愛行動が性的嗜好というものは個人の自由であり、他人や社会におさえつけられるものではないはずである。

今はまだ難しいことかも知れないが、いつの日か日本社会においても同性愛に対する差別や偏見がなくなり、誰もが自由に恋愛を楽しめる日が来るのを願ってやまない。

（注）

〝Closet〞 Love とは造語であり、同性愛者の恋愛は〝とじこめられた〞恋愛である、という意味。

〝モノガミー〞とは単一のパートナーだけと付き合う（付き合いたい）人のことをいい、〝ポリガミー〞とは複数のパートナーと付き合う（付き合いたい）人のことをさす。